

## 論文審査の要旨

筆頭著者（学位申請者）氏名

石川 雅也

主論文の題目  
および

掲載誌・審査委員

題目 うつ病患者に対する主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版 (SWNS-J)を用いたアリピプラゾール内容液の有用性に関する研究

掲載誌 最新精神医学 2016; 21: 241-246

主査 古茶 大樹

副査 長谷川 泰弘

副査 鈴木 真奈絵

[論文の要旨・価値] うつ病患者の病初期の不安は、治療上の重要な課題である。この不安症状には、従来からベンゾジアゼピン系薬剤（以下、BZ系薬）が併用されることが多かったが、BZ系薬には依存性や認知機能への悪影響も報告されており、BZ系薬に頼らない治療が模索されている。本研究はそのような臨床的必要性から、すでにBZ系薬が投与されていて十分な改善が得られていない症例に対して、BZ系薬をアリピプラゾール内用液（同薬剤の液剤である、以下APZ）にスイッチして症状の改善を評価したものである。この研究では、患者の自覚的改善度あるいはQOLにより焦点を当てるため、主観的ウェルビーイング評価尺度短縮版（Subjective Well-being under Neuroleptic drug treatment short form, Japanese version、以下SWNS-J）を使っており、その評価が、抑うつ症状の客観的評価スケールとして確立しているモンゴメリ・アスベルグうつ病評価尺度（Montgomery and Asberg Depression Rating Scale、以下MADRS）による評価とどのような関係があるかについても検討している。研究方法は、クリニックにうつ病の診断で通院している患者のうち、当初BZ系薬が投与されAPZ内用液に変更されていた患者を対象とする、後方視的研究である。BZ系薬からAPZ内用液への切り替え時を0週、そして4～8週時をエンドポイントとしてSWNS-JおよびMADRSを用いて評価を行った。対象患者は69名。このうち19例が脱落し、残る50症例が解析対象となった。SWNS-Jによる主観変化の評価は切り替え時 $45.72 \pm 10.32$ 、切り替え後 $56.20 \pm 10.93$ であり、有意な改善が示された（ $P < 0.05$ ）。MADRSによるうつ症状変化の評価についても有意な改善が示され、SWNS-JとMADRASとの相関関係も示された。病初期の不安症状の強いうつ病患者の治療において、抗うつ薬を使用しながらAPZ内用液を適切に併用するという新しい治療選択肢が、患者のQOLを向上する可能性があることが示唆され、その評価にSWNS-Jが有用であることも示された。

[審査概要]プレゼンテーションの後、基礎知識の確認、背景、研究デザイン、結果・考察について質疑応答がなされた。うつ病患者におけるセロトニン・ドパミン動態、特定患者群に着目した理由、SWNS-Jを使用した理由については概ね説得力のある応答をしていた。研究デザインについて、コントロール群がないこと、本来ならば研究対象に含むべきケース（効果不十分例）を除外していること、そのため考察で展開される主張の説得力が弱まってしまったことが指摘された。これに対して、今後の研究において、どのような点に留意すべきかは適切な応答ができていた。

## 最終試験結果の要旨

[研究能力・専門的学識・外国語（英語）試験等の評価]プレゼンテーションや応答に戸惑う場面はあったが専門的学識は十分である。日々の診療から導かれた臨床的な疑問を研究によって確かめようとする姿勢は高く評価された。開業医が日常診療と並行して臨床研究を進めることは容易なことではなく、その点も鑑み学位を授与するに値するものと審査員一同の意見の一致を見た。英語は引用文献の抄録をその場で指定し訳してもらうことで評価し、十分な語学力を有すると判断した。